





## 『浪人生ここまで減ったとは』 鴻上尚史さんと歩く予備校

センター試験（1月17日・18日実施）まで1カ月を切り、予備校の冬期講習もかき入れ時だが、大教室での授業は今や昔、最近ではスタジオで収録されたものをパソコンで見ることが増えているらしい。その先鞭（せんべん）をつけた東進ハイスクールを、浪人経験を踏まえた小説「八月の犬は二度吠（ほ）える」もある、劇作家で演出家の鴻上尚史さんと訪ねた。

12月上旬、冬期講習中の東進新宿エルタワー校の教室。この校舎の生徒は現役生なので、平日正午の教室は閑散としていた。座席ごとにパーティションで区切られたブースにはパソコン。スタジオで収録された講師による映像授業を、校舎に常駐する担任の職員らと相談して選ぶ。対面の授業はほとんどない。

愛媛の高校を卒業後、寮生活をしながら京都の予備校に通い、早稲田大学法学部に合格した鴻上さん。ブースで「来た時より綺麗（きれい）な机に」という貼り紙を見つけ、「（予備校が舞台のドラマを作るときでも）ここまで思いつかない。リアルでいい」と笑う。

早速、「今でしょ」で時の人になった現代文講師の林修さんのセンター試験対策講座を体験した。画面の中で林さんは身ぶり手ぶりを交えて攻略法を説明する。見終わるや否や、鴻上さんは「さすががしい」と口にした。「受験は技術。余計なことは言わず、技術を磨いて勝ちましょうね」と言っていて、すごく分かりやすい。建前が横行しがちな学校と違い、予備校は本音の勝負。だから「好きになった先生は、高校より予備校の方が多かった」と言う。

東進は全国94校とフランチャイズの衛星予備校895校で映像授業を提供（11月末時点）。授業数は1万5千で、毎年3千～4千が更新される。東進の運営会社ナガセの市村秀二・上級執行役員は「生徒によってレベルも時間の使い方も違う。映像の授業の方がカリキュラムやスケジュールを個人に合った形で提供できる。地域格差がなく、教育の機会均等にもなる」と話す。

スタジオ収録なので、講師の手元を映し、問題を解く過程を可視化するという工夫も。

演劇のワークショップなどをしばしば開く鴻上さんは、「生徒が30人くらいなら、一人ひとりの疑問に答えられる。でも、100人、200人になると、教える方が混乱してしまう。大教室の授業よりこのスタイルの方がいい」と評する。

談話スペースで昼食中だった早稲田大志望の高3男子は、「慣れると、映像授業への違和感はない。停止や再生ができるので、寝るときは止めるし」と話す。鴻上さんは「大教室の授業では、座っているだけなのに勉強したという錯覚に陥りがち。パソコンの前で寝てしまうと、サボっている実感が出て、責め苦が強いのでいい」。

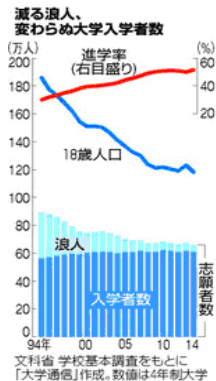
少子化で18歳人口が減り、えり好みをしなければ誰でも進学できる「大学全入時代」。1990年度に約40万人いた浪人は、今年度は約5万人しかいない。代々木ゼミナールは8月、全国27の校舎のうち20を来春閉鎖すると発表し、時代の変化をまざまざと見せた。

浪人のメインは、東大や国立公立理系といった難関にこだわる層とされる。教室に居合わせた立教大を目指す高3女子も「就職を考えると、私大文系は浪人できない。世間体もあるし」。鴻上さんは「世間体って言葉は久しぶりに聞いたなあ」と破顔した。

予備校では授業以外のことも学べる。「講師は、生徒からの支持、不支援が問われる。若い時に、大人が子どもにこびるのを見るのはいい経験。大人も大変だと分かれば、相手のことを知り、理解するきっかけになりますから」（文・岩田智博）〈大学受験〉この20年間で18歳人口は約3分の2になったが、大学進学率が5割を超えたため、入学者数はほぼ同じ。現役合格が増え、浪人はピーク時の約8分の1まで減った。東大は2016年度入試から現在の後期日程に代えて推薦入試を導入。センター試験も早ければ20年度に、思考力重視の「大学入学希望者学力評価テスト」（仮称）に変わる予定だ。

浪人生がここまで減ったと聞いて驚きました。大学全入時代になったことや、昨今の経済事情の影響もあるのでしょうか。それでも、浪人して予備校に通った僕は「浪人の意義」を感じています。僕たちの時代は、現役で入ろうと思っていたのに不合格になり、やむなく浪人した人が多かった。当時の浪人は、日本社会ではすごく珍しい、定義され得ない時間でした。

多くの日本人が、現役で大学に入り、新卒で就職し、60歳で定年という「名付けられた時間」を生きることを強いられてきました。今でもそうした傾向は強い。だからこそ、「空白の時間」である浪人には意味があった。



予備校時代の最後に自主的な卒業式が行われ、信頼する先生に花束を渡した。「これが本当の卒業式だな」と感じました。あなたの授業のおかげで充実した勉強ができて、本当に世話になったという感謝に満ち満ちていた。その空間に「偽善」はありませんでした。

でも、一浪が「ひとなみ」と読まれ、当たり前になった90年代は、浪人が高校の延長として組み込まれた時間になってしまった。それでは価値がない。浪人が減った背景には、そうした変化もあるのではないのでしょうか。

年が明けると、センター試験です。受験生には、受験勉強をすることで、本当に大切な勉強と、受験のためのムダな勉強を見分ける素地をつくってほしい。本当に大切なことは大学に入ってから始まるので、今は苦しくても乗り越えて下さい。

朝日新聞デジタル 12.12

## ■道徳教育の教科化、教委制度の見直し 学校現場、改革に懸念■

安倍政権が景気回復と並ぶ最重要課題と位置づける「教育再生」。政権復帰したこの2年で、道徳教育の教科化や教育委員会制度の見直しなど、戦後教育を大きく転換する政策を矢継ぎ早に打ち出してきた。しかし、今回の衆院選で教育問題をめぐ



る論戦は低調だ。学校現場からは、政治色の強い改革の行方に懸念が広がっている。

夏休み直前の7月中旬、全国の小中学校に文科省から事務連絡が届いた。本年度から配布が始まった新教材「私たちの道徳」を休み期間中、自宅に持ち帰って家庭や地域で活用するよう求める内容だった。「霞が関から地方の学校にまで口出しするのか」。県中部の小学校の40代男性教諭は、かつてない経験に驚いた。

「愛国心」を重視する安倍晋三首相が力を入れる道徳教育。「私たちの道徳」は従来の「心のノート」を全面改定、ページ数は1.5倍に増えた。授業での活用状況も調査するなど、「学校現場へのプレッシャーは強まっている」という。

男性教諭は教材の中で「義務ばかりが強調されている」と感じている。「権利を主張するのが悪いことみたいに描かれている。これから国際化が進む中で多様な価値観を認め合うことが大切なのに」

道徳は2018年をめどに、検定教科書を使う正式教科となり、子どもの「内心」を評価することになる。「モノ言わぬ人づくりに手を貸すことにならないか」。そんな不安を漏らす。

全国学力テストの学校別成績公表の容認など賛否が分かれる政策も、「自民1強」の政治環境下で、ほぼ「素通り」の状態。いじめ問題を契機に教育委員会制度改革にも乗り出し、自治体の首長権限を強化した改正地方教育行政法が来年4月から施行される。

「政治が現場を信頼せず、露骨に介入するようになりつつある」と県中部の中学校長。学力向上、いじめ問題、ICT（情報通信技術）教育など、学校現場だけでは解決困難な教育課題は確かに山積している。その一方で「政治家自身の意向が優先されている」危うさを感じるという。

統計では子どもの6人に1人が貧困状態。家庭の経済状況が学力差を広げ、「格差」の固定につながる指摘される。「学力テストで競争をあおることは熱心なのに、成績下位の子どもたちの背後にある家庭環境には目を向けようとしていない」。福祉的支援を含めたきめ細かな対策は、現場の教師たちが担わざるを得ないのが実情だ。

選挙戦では、野党側も少人数学級の拡充や高校無償化、奨学金見直しなど教育環境の整備などを訴えているが、「教育再生」の対立軸として争点化には至っていない。校長は言う。「人口減で少子化対策が重要なら、子どもをどう育てるかは欠かせない視点なのに…」

佐賀新聞 2014.12.11

## ■消えた昆虫写真-ジャポニカ学習帳■

気持ち悪いのだそうだ。だから、昆虫の写真を使わないでくれというクレームがメーカーに舞い込み、結局は消えてしまうことになった。

保護者の皆さんは使った記憶があるでしょう。こういう、良いものが、自分の好みに合わないということでクレームをつけ、結局は消し去ってしまうというのはいかがなものでしょうか。

そして一方では、カブトムシなどを何万円も出して取引し、子供たちの中には小遣いで買う子もいるという現象も普通に起きている。

メーカー（ショウワノート）も、気に入らなかつたら買わなくても結構です」とは言えないのが、昨今のネット社会の弱みなのだろう（すぐにネットに乗せてメーカーを非難するやつが出る）。教師からも気持ち悪いという声が出たというが、何をかいわんやである。嘆かわしいことですね。

